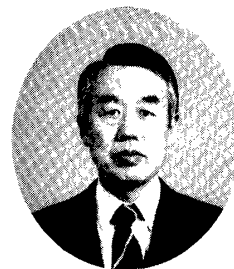


## AI 産業

山本 正隆\*



産業人、あるいはメーカーの人間としての立場から、AI に対する見通しや期待などを述べてみたい。

まず市場である。AI は、コンピュータシステムが進化した状況での新しい応用分野の拡がりともなせる。したがって、AI 市場という新しい市場が、にわかに出現したとみるべきではなく、従来からのコンピュータ市場のなかで、AI よりの応用が増えてゆくにとらえる。すなわち、AI 産業は、コンピュータ産業の一部である。

従来、コンピュータ産業は、年率 15% 以上の高率で成長してきた。これは、マシンの高性能化によるシステムの大規模広域化によるものと、パソコンなどによる裾野の拡大効果によるものである。しかし、このうちシステムの大形化は、いわゆる巨大システム症候群（システム設計、ソフトウェア開発、セキュリティ、メンテナンスなどのボトルネック現象）の出現で、成長は確実に鈍化しつつある。しかし、それにもかかわらず、情報処理関係は今後も着実にのび、21 世紀へ向けてのリーディング産業だと言いつけられている。このギャップを補うものが AI であることは、AI が、コンピュータシステムの進化形であることからみても、もはや疑う余地はない。AI 部分だけののびが、今後、年率 30% 程度といわれていることから、コンピュータシステムのなかで AI の占める割合が、今後急速に増えてゆくともみなければならない。

コンピュータは、従来、省力効果はむろんのこと、シミュレーションなどによる設計精度の向上、設計期間の短縮、遠隔ファイルの照会が容易になったことによる物流の効率化、数値データ処理の高速化による金銭取引の即時化などの効果として、経済の飛躍的活性化をもたらした。すなわちコンピュータは、経済の時代の力の媒体として活躍したのである。産業の資源である人・物・金のうち、金の運用に関して、コンピュータは、強力にそれを支援してきた。人・物・金に加えて、情報を資源とみるべきだとする人が多い。しかし、情報は、たんなるデータと異なり、人間の理解と判断をともなって初めて意味のあるものであり、従来、人にかかわるものとして、資源としてはいわゆる人材として扱ってさしつかえなかった。AI は、知識を用いた判断に関する支援システムであるから、AI が進展すると、情報が人から離されて独立した形で資源化することになるであろう。企業の力を誇示するのに、技術者何人、ロボット何台に加えて、エキスパートシステム何システムというようになる。経済の時代の次は、ハイテクに象徴される技術の時代といわれる。技術の時代を特徴づけるものは、情報の資源化、知識の流通であろう。すなわち経済の時代の金にかわって力は、技術であり、その媒体が AI である。

コンピュータの普及で、プログラマという新しい職業が発生し、人口も日本で 50 万を越え、ソフトハウスが林立し、派遣法などもできるほどになった。AI もまた、新しい職業を生み出す可能性は高い。ナレッジエンジニア (KE) もその 1 つかもしれない。KE は、問題解決手法としてのエキスパートシェルをもった、知的プロセスコンサルタントでなければならない。現在の SE とは質的に異なった、高度な知的職業になるはずである。

コンピュータは、文化に大きな影響を与えてきた。卑近な例はワープロである。この普及で、今後多くの日本人は、漢字は読めるけれど書けないということになる。AI の文化への影響は、従来のコンピュータの比ではなからう。ベンダーの立場からすれば、市場が拡がり、売れるからといって、勝手にやってよいものかどうか自戒の念を強めていかねばならない。文化を破壊しないよう、よい文化を守りながら、新しい文化を創り出していく責任が、AI 技術者に課せられている。AI 学会への期待はそこにある。研究者や技術者は、技術的興味ということで、またメーカーは他社との差別化ということで、ともすれば暴走する。AI にかかわるものが、安心して研究・開発を進められるよう AI に対する正しい方向づけを行い、その方向にガイドする役目が、学会であろう。学会会長、副会長をはじめとする諸先生の御教示に深謝するとともに、学会のますますの発展を祈りたい。

\* 沖電気工業(株)総合システム研究所所長